ひ、其大庭に幕打ち揚げて最後の御酒宴あり、親王の御鎧には矢七筋、流るゝ血汐も拭はせ給はず、敷皮の上に立ちながら、大なる盃を三度まで傾けさせ給ふに、いくばくもあらぬに、村上彦四郎義光、鎧に十六筋の矢を被り、枯野に殘る冬草の、風に偃したる如くに折り懸けて、宮の御前に參つて申しけるは、大手の一の木戸云甲斐もなく打敗られ、二の木戸に支へて數刻相戰ひ候も、味方の氣のつかれ候ひぬれば、この城にて功を立てむこと今は叶はじと覺え候、とく一方を打破りて、一先落させ給へ、但し跡に殘り留りて戰ふものなくば、御所の落させ給ふものなりと心得て、追懸け進らせむ、かくては一大事なり、何とぞ召させ給ふ御鎧と御物具とを、この義光に下し賜はれ、かしこきことながら、御諱を冒しまつりて、御命にかはらむとまをす、宮いかでかさる事あるべき、死なば一處にてこそ兎も角ならめと仰せられたるを、義光言葉をあらゝげ、さるあさましき事なのたまひそ、天下の事は御身にかゝつまれり、のがれさせ給へとて御鎧の上帶をとき奉れば、親王もげにもとおぼして、鎧直垂までぬぎかへさせ給ひ、義光汝よく聞け、汝は我が爲にはいふべからざる忠臣なり、今汝のすゝめによりてこゝにてわかるべし、われ若し生ながらへたらひには必ず汝が後生を弔ふべし、もしまた敵の手にかゝらば冥途までも同じ巷に伴ふべしと仰せられて、御涙を流させ給ひながら、勝手の明神の御前を南に向つて落させ給へば、義光は二の木戸の高櫓にのぼり、遥に宮を見送りまつりて、其影のかすかに隔らせ給ひぬれば、櫓の板切り落して身をあらはにして大音聲にて名のりけるは、後醍醐天皇の第三皇子一品兵部卿親王護良、逆臣のために亡ぼされ、恨を泉下に報せん爲めに只今自害する有樣見置きて、汝等が武運忽ち盡きて、腹切らんずる時の手本にせよと云ひも終らぬに、鎧を脱ぎ腹十文字にかき切り、腸つかんで櫓の板になげつけ、太刀を口にくはへてそのまゝにうちふしにけり、千載の姦黨骨亡朽ちて、惡しき名のみ後に殘りて、世の譏り草となり、義光獨り苦節ありし事と共に、永く芳芬を殘しけり、昔の樓門亦朽ちて、石の斯の芋瀬庄司を言刎ねて、錦の御旗を取かへし事を、上冷やかに、鳴く虫の音もあはれとぞ聞ゆれ、實にや吉野の山櫻斯くも大和心とゆかりあるかな。

實城寺跡

藏王堂の西の崖を西の尾とは云、是なん實城寺の跡なる金峯山の本坊にして即ち大學頭の住坊なり、延元の初め後醍醐天皇吉水院を行在所となし、後此寺を行宮と定められしより、金輪王寺と稱し、金輪寺御處又黑木御處とも云、後幾多の變遷あり、今は黃粱の夢と化して、其跡には櫻木と雜草のみ生ひ茂りて、さりげなき景色にこそありけり、哀れなる哉、昔は九重の裡、金谷の巷の花を弄び給ひしものを、一天萬乘の大君なるものを、いかに御稜威の衰へさせ給ふ時なりとは云へ、今は吉野の散る花も愛で給ふ事さへ難く、尊き御身とてかゝるわびしきすまひに、朝な夕なに、逆心の爲めに御心を碎かせ給ひけん程こそ推量られて、哀れにも覺ぼゆれ、哀れ草叢になくきりぐす、あはれ昔におくなる白露、幾秋なくとも其恨は、はるゝ時なからむ、幾年おくもその恨は消ゆるをりなからむ、あはれ〳〵〳〵恨めしきその世の事どもなる哉。

如意輪堂と後醍醐天皇の御陵

樂所敷折、中の千本の眺を左に見つゝも、幽邃閑雅俗塵の端だになき淸楚の地に至る、これぞ即ち如意輪堂にして、楠正行が辭世の歌「かへらじとかねて思へば梓弓なき數に入る名をぞとどめむる」と矢じりもて認め

けん如意輪塔は此わたりにこそあゝめれ、寺域頗る清雅にして東三面は山塞り、西方谷に臨みて見渡す所は櫻樹千章生ひ茂れる中、近時楓をはさみて眺絶佳なり、石磴を攀づる數百級、乃ち延元帝の御陵あり、塔尾陵と云ふ、石の玉垣を繞らして、喬木隱森として天日を蔽へる中、古墳あり、苔蒸して厭くまで青く、閑古の風、朴素の態、自ら人をして心を眞邪の月と澄ましめて、五百七十有餘年の昔を偲ばせし時滿目蕭として齊しく泪にうるほひぬ。

遊芳野　菅茶山

萬人買レ醉攪二芳叢一　感慨誰能興我同
恨殺殘紅花向レ北　延元陵上落花風

芳野　河野鐵兜

山禽叫斷夜寂寥　無恨春風恨末レ消
露臥延元陵下月　滿身花影夢南朝

坂下に正行公埋髮墳並に後醍醐天皇御靈殿、至倩塚、忠僧宗信等の墳あり、如意輪寺の寶庫にに、斯の正行が書けりてふ「かへらじとかねて思ひ入る名をぞとゞむる」としるされし扉あり、其他後醍醐天皇の御物行者御作の佛像など藏せられたり、中にも正行の遺物など事かはりて覺ぼゆれ

我宿の花の紅葉のなき時は
光とたの庭の白雪　正成

年月を心にかけて芳野山
花のさかりとけふ見つる哉　秀吉

吉水神社

如意輪寺の坂を下り、柿の落葉を踏分けて吉野町の裏方を行けば吉水神社ありて、吉水院といふは即是なり祭るところは後醍醐帝楠正成の二柱なり、吉水院の草創は役小角大峰山修業の時、姑息の庵室にして、後ち聖賢法師も此に宿りて修行せしとぞ、延元の元十二月、住職宗信の奉迎によりて、後醍醐天皇暫し行在所となし給ひぬ、其時の御製に

花にねてよしや吉野の吉水の　枕のもとに岩はしる音

室内を拜觀するに、客殿には義經潛居の間、辨慶思案の間と云あり、玉座には畏くも　後醍醐　後村上　長慶後龜山四帝のおはしゝ所なりと聞く、寶物展覽室には南朝諸帝の御物、及忠臣の遺物とを納めて尊き處なり。盛者必衰の理はそも延元の元、後醍醐天皇が吉水院に假の皇后を定め給ひしより山里は物淋しきところに、天下の機務をとらせ給ひ、延元四年八月の半ば、千古の恨を思はせつゝも、夕暮告ぐる野寺の鐘に分けくる草葉の露いと濕み、鹿の音虫の聲々、物の哀れを取集めたる十六日の黃昏に、乙の行宮に崩じ給ひ畏。思ひつきせぬ吉野の遊び、南朝の夢のかなしみは、幾とせなくも消ゆざらむに、日に限りある此旅行、先急ぐ身のせんかたなくて、たゞ秋の日の短きをかこちつゝ、なき洋服の袖までも引かるゝ心地にて、吉野川下す筏と諸共に、今宵の旅枕と定められたる下市にこそ着きにけり、あと見かへれば芳山暮雲に隔りて、過ぎ

來し道やいと遠し。あゝ。

○『此一戰』を讀む

第四學年　久野元治郎

日露戰爭は吾帝國をして一躍世界の大舞臺に押し出だしたる千古空前の一大快擧なりき。否寧ろ一大孤注なりき、兵の勝敗は數に在ずして未だ氣にあるを知らざる歐米の人士が齊しく、帝國の義憤を以て是れ伏鷄の狸を搏ち乳犬の虎を犯すに等しとせしもの豈亦故なしとせんや。而も見よ、義に凝る帝國勇士の劍の輝く所旗の飜る所攻めて取らざるなく擊ちて破らざるなきを。戰局漸く轉々して遂に、三十八年五月廿七日、日本海大海戰となれり。想へ、この大海戰に於ける兩國の勝敗こそは、遂に全局の決する所たることを。而も何の幸ぞ、遠く聖上陛下の御稜威と、帝國勇士の忠烈に據り、帝國は愛に振古未曾有の大捷を收むることを得たり。然れども若しこの大海戰にして、彼我の勝敗その地を代へ、制海の權全く敵手に歸したりとせよ、軍事上に於て通商上に於て將亦外交、財政上に於て帝國の被るべき結果それ果して如何。臺灣を奪るゝ忍ぶべし、北海道を割かるゝも尙耐ふべし。唯大日本帝國なる獨立國の存在を危くすると無んば幸也。東郷大將が「皇國の興廢此の一戰にあり」と言ひしもの强ち誇張の言とは言ふべからざる也。

僕頃日餘暇を得て海軍少佐水野廣德氏の著せる日本海々戰錄「此一戰」を讀む。抑も「此一戰」たる筆を

バルチック艦隊萬里の遠征に起し、慘絕壯絕の實況を叙すること最も巧に、彼我戰略の巧拙、軍機の粗密を繹ぬること最も妙、時に忠烈血湧き肉躍るの節あり、時に悲壯の涙を禁じ得ざるの節あり、文勢雄渾、詞句佳麗、趣味津々として讀むものをして、卷を掩ふ能はざらしむ、時に「大和魂」「スラブ魂」、最後に「戰捷の因緣」「戰の悟覺」に至りては、我が帝國々民たるもの〻必らず一讀を要するものなる事を信ず。

著者は日本海々戰當時第四十一號艇長として奮戰したる名譽の士役後海軍々令部にありて日露海戰史の編纂に從事し、專ら筆を戰紀に執れり、然れども官撰は、唯正確簡明を主とするを以て讀者或は之れを咀嚼するに至らずして止むの遺憾を察し、公務の餘暇を以て、拮据黽勉別にこの書を成し、東郷大將の信號訓示に因みて題して「此一戰」と稱ふ。其の自序に曰く、

余謂らく一卒の行動も尙之れを文に詠み、琵琶に彈じてその忠烈を千載に傳ふ、然るに皇國の興廢を一戰に期したる日本海々戰に至りては、世上唯その大捷あるを知つて未だその眞相を知る人尠し、想ふに是れ海戰の狀況は、海軍部外者の窺知し難き所たると共に海軍部內者に於ては、公務多端にして文筆の閑技に、たづさはるの暇なきに因るものならむ、然りと雖も、此の大海戰の眞相、時と共に湮滅に歸するは終世の恨事也、幸に已れ親しく海戰に臨み、又乏を三十七八年海戰史の編纂に承け、稍日本海々戰に關して知れる所あり。非才を顧ず、自ら涓人死馬の骨となて驥駿の續出を待たんと、深く揣らず卽夜稿を起せしも爾來公私の用務に支へられて、執筆意に任せず荏苒遂に以て今日に至れり

本書著作の目的は、專ら日本海大海戰の實況を、廣く江湖に紹介せんと欲するに存し、固より兵學攻究

の爲めに非ず、故に戰畧戰術の問題に至りては、努めて之れを避けたりと雖も、苟も成敗の跡を繹ね利鈍の數を明にせんが爲めには、戰書の常として、絶對に之れを省除すること能はず、唯味噌の味噌臭きは、寧ろ味噌の生臭きより優るとして讀者の諒を請ふ所也

著者素と是一介の武弁、嘗て文辭に肆はず章句に熟せず、加ふるに吾人の筆は、軍機の桎梏と國交の鐵鎖とに制縛せられ述べんと欲して述ぶる能はず、書かんと欲して書く能はず、自ら隔靴搔痒の感に耐ゑざるもの尠なからず、然れども此の忍耐こそ皇國大捷の一因たりしを考ふれば、是れ著者の讀者と共に悅んで忍ばんと欲する所也……と。

又以て著者が志の存する所と、其の若心の跡とを察して餘りあるものあらむ。

夫れ天下安しと雖も戰を忘るゝ時は必らず危し、永く日本海大海戰を紀念するは之れ豈我が日本人の責務ならずや。由來我日本人にして誇るべきもの唯一つあり、武士道の精神、即ち大和魂是れのみ、この精神にして滅せざる限り、日本たとへ小なりとは言へ、尙東亞の一角に雄飛するを得べし、墮落せる文明の空氣に軟化し切らざる限り、今尙日本海々戰當時の意氣を忘れ切らざる限り、我大日本帝國の前途は必ずや萬々歲也、近時一部の輕薄なる思想は漸く世人の間に傳播し、滿州埋骨の土、未だ全く乾かざるに、人既に、この勇士の貴き血もて購ひ得たる平和に中毒せんとするの感なきにしもあらず。吾人學生たるもの、須くこの軟風を擊滅し、進んで帝國の前途をして、正に泰山の安きに置くの覺悟なかるべからず、諸君若し、日本海大海戰の實況を伺ひ、兼ねて忠烈の志氣を涵養せんとならば僕は敢て薦む乞ふこの書を一讀せよ。(完)

練兵見學

○見學記事

第五年級　理　事

長い休みが終つて二學期が殆まつた時池田先生から大体の方針を話され、それから一生懸命に練習を勵んで其の日の來るのを待つてゐた敦賀聯隊へ實包射擊に行く事は、いよ〳〵十月十八日から三日がけにて行はるゝ事になつた

第一日（十月十八日）晴れ

御子柴、池田、成宮の三先生にともなはれて、武裝したる五學年生徒四十二名は彦根午前七時發の列車に乘り込んだ、隊は四個の分隊よりなる、米原にて、北行の列車に乘りかふ、空よく晴れて黃田穗々、木の本を過ぎてよりは山又山、瀧關車二ッ瀧車の歩みも重もたげなり、柳瀨を過ぐればトンチル三ッ四ッ、出づればこゝは既に越前、正田の驛を去るとまなしに敦賀の市衢は眼前にあらはる、十時着敦、これより一里半の道を金山に向ふ途中時雨にあひてのかけ足は一同大閊口、弱い話だが其の時は非常に困しかつた……何分着劍銃に外套つきの背嚢といふのでなれないから……金山の手まへにて勇ましき喇叭の響きこゝ練兵場で

教練せるを見た、十一時迄金山着、宿は西菊田

我れ等の此度兵營見學にきたにつき聯隊では其の日割を次の如く定められた

、十八日午後一時より

營内及舍内參觀（舍内は第四中隊とす）

下士兵卒の器械体操、銃劍術（器械体操場に於て）

但し當日雨天の節は銃劍術は第一大隊雪中演習場に於て施行し器械体操は十九日午後に施行す。

十九日午前八時より

實包射撃（金山小銃射撃場に於て）

同　日午後一時より

中隊教練の見學（第十二隊とし場所は練兵場とす）

二十日午前八時より

生徒教練の檢閲（練兵場に於て）

備　考

一、木村中佐は一般の監督指導をなすべし

二、寺村中尉、谷口見習士官は木村中佐の指揮をうけ生徒の案内、射撃場の設備及細部の打合せに任すべし

三、射撃場のため要する所要の使役兵は第二大隊より出すべし

午後一時から成宮先生に連れられて兵營に行く、宿より衛門まで一丁ばかり宿の前のまだ向ふから木柵が並んでゐて廣い若狭道とは幅四尺ばかりの溝でくぎられゐる、道からは木柵の間を通して兵士の梁木のあたりや器械体操場の邊で遊んでゐるのがよく見ゐる、丁度十一時から一時までは休憩時である、營門までくると歩哨が立つてゐて出入に注意をしてゐる、この營門の出入は極めて神聖なので吾等も歩調をとつて体伍蕭々とはいつたはいつた處で暫く休んでゐるとすぐ左方に歩哨の交体のために兵が五六人ショーギに腰かけて並んでゐる、兵は衛門を出入するにはきつとこゝにきて敬禮をして通る、時雨がきた自分等はすぐそばの卒面會所で雨をさけさしてもらふ事にした、中には極めて質素な丈夫な机が二つあつてその上に同じ樣な腰かけがのせてあつた。

そうしてる中に先に營所に御出になつた御子紫先生と池田先生並に本校出身の寺村中尉、谷口見習士官がはいつてこられ、この二先輩の案内でいよ〳〵參觀にとでかけた、二列の縱隊にならんで先づ第一に行つたのが第四中隊、はいると左方に姿見が〳〵つてある、そこへ中隊長殿が出られ正面の階段に立つてそこにかゝつてある柱時計を指しておとなしひ口調で話される「先づ第一に見てもらいたいのはこの時計である、軍隊にてはすべてこの時計によつて萬事をするのでこれがすべての臺となつてゐる、この時計はよく合つてゐて兵營内のいづれの時計とも一分一秒も違つていないのである」階段の左右に廊下があつて吾等は左方にと導かれた、廊下の左右は兵士の室にてどの室にも眞中に大きなテーブルその両側に寢臺がずつと並んでである。

寢臺の上の方はたなになつてゐて兵士のものが極めて整然として置いてある、シャツの如きもちんとたゝみ恰もステロの樣に並んでゐてこれだけにてすぐに兵士の規律のよくゆきとゞいてゐるのが知れる、室の入口の左右には銃が並んでゐる、いづれもよく掃除がゆきとゞいて塵一つとゞめず其きれいなのには驚く外はない、中隊長殿は一室の前に立たれて色々背嚢とか水筒とか兵士の品々を示して說明して下さる、兵士の平素使つてゐる銃は三十年式にて學校にて余等の使ふてゐるのと同じ型である然し三八式のもあつた、池田先生谷口見習士官より說明を下さる室内はごく質素にて兵士の質素を第一としてゐるといふ事がよくわかる。かくて一通見てどの室もかくの如しとの事にて四中隊を辭し第一大隊の炊事場に行く、五六人の兵士が牛肉を調理してゐる一人の中尉が監督をしてゐたが余等に米をかしひで見せてくれた、ごく便利な方法でまた〻く間に一斗や二斗はかしげる、多くの兵卒のたべるのだからかくあらねばならぬとつくづく思つた、第三大隊の方にて見るとの事にてこゝはそこ〳〵にして次は雪中体操場にはいつた、大きな建物ではいつた處に器械体操と平行棒があつた、約一小隊ばかりの兵がまさに銃劍術をやらうとする所で兵は道具をつけ左右に分れて先づ型より始めて互角仕合に入つた、双方より二名づゝの兵が出て二手にて仕合をやる、今井軍曹と柴田軍曹といふが各々の審判、實に凄い程の目で以て兵の仕合を見てゐるヤツヤ直突！肩下脫突！兵は全精神を入れてやるので見てゐても小氣味よくしまひには恐ろしい程に感じた、一通りすんで後に兩審判の三本仕合があつた、この審判は一人の中尉殿この二軍曹は隊にて錚々たる人にして仕合ははげしく龍虎の爭にも似

宰はごく明快、實にこの銃劍術の處にては一同軍人の勇武の風に深い印象をのこした、そこを出ると右方に倉があるまはりは堤になつて居て兵がその上に立つて番をしてゐる、火藥庫だと云ふ、次に見たのが兵の靴をなはしたりシャツをなはしたりするところ〻へ今の審判をされし中尉殿がこられて說明して下さつた、醫務室をのぞきて次に行きしは倉庫大きな倉が四棟並んでゐる、第一番目の倉庫にはいつた、入るとすぐにナフタリンの强い香が鼻をつく、背嚢等は新らしひのがいれてあつたがこの階上は戰時倉庫なので見る事は許されなかつた次きさの中尉殿がこられて言はれる樣「戰爭は兵士に取りては晴れの舞臺なのでいざ鎌倉といふ時に身をかざる爲戰時の晴衣に新らしひものをのこして古いのからきて行くので今年こしらへたのは約十二年後でなくては兵にきせることは出來ないのである、今日の日本財政が許さないので隊にては全くつかいきれなくなる迄保存せられてある」と丁寧に說明される終りの倉は平常用なるものがしまつてあるのでこゝは秘密でないからとて階上階下をくまなく示され一々說明を加へらる、毛布、上衣、下衣、帽子等兵士の日用品はすべてこゝにしまはれてあつた、ナフタリンの香には困る程なり、これより所謂營倉なるものを見た一人もはいつてゐる人はなかつた本聯隊にて營倉に入る者はまれなりと云ふ、こゝを出ると最初にはいりし營門の處これより方向を轉んじて第三大隊の方に向ふ、この炊事場にては丁度夕飯の仕度最中にてビーフのうまさうな味噌燒の香には皆んなの鼻がうごめた樣であつた、飯をはかりにかけて人數によりてわりあて各中隊にもちかへる器具等あつた、わづか一人分があるみ製の椀に一杯とは我々には少し悲觀、飯は麥四分に米六分の割合とぞ、こゝを出づれば酒保なり、酒保は階上は下士の集會所なり、こゝにはテーブルあちこちに置かれ其の上に盆栽あり、又壁間には大きな姿見又は兵士の肩章とか勳章とかの種類をかくにしたの

や或は忠義の士の教訓書をかゝげ等しかゝる所にまで細心の注意をなして兵士に知らす〳〵の間に軍隊教育をなし得る樣になつてゐつた、一隅に日用品を賣る店あり夕食の喇叭後は食品をもうると云ふ、こゝにてしばし休憩、この時若杉大尉殿より一場の演說あり、嚴格なる口調をもつて「余は諸君の吾が聯隊を參觀に來られし事を深く歡迎す」との言葉を前提に軍人に下し給へる五ヶ條の御勅諭を基として、質素、禮義、節義共同一致、服從等の事につき或はこれを軍人にあてはめ又生徒にあてはめ懇切にとかれた、こゝにても甚大なる印象を與へられた、こゝを出でて旅團司令部、聯隊司令部の側を通つて隊の病院にいつた、軍醫の人に導かれて廊下を傳つて奥に行く、重患者はこゝに入れられて養生するのである、病室誤桑室、手術室等を見てとある廊下の角に來た時傳染病のバイキンにつきてくはしく話された廊下には患者の名を記した札があつてその上に白き丸をつけ○の一部が赤くしてあるは重病患者にて急なる場合に擔架に乘せて出るとか、いやせおつて出るとかと夫〳〵話さる、それより傳染病患者の病室に行きてチブスと懶病のバイキンを見せてもらつた、この軍醫も親切に說明下さつたのはうれしかつた、こゝを出でゝ將校集會所に行く右方に校庭射擊場があつた、其の道も兵士がわちこちで盛かんに体操とか銃劍術をやつてゐるのを見た、將校集會所は將校の辯當を食し又は娛樂をなす所でさきの酒保にくらべると大いに立派であつた、昨秋　皇太子殿下行啓被遊し御便殿あり又殿下御手植の松もありたりこは一巡せしめみ、器械体操は明日にのび、これにて一通り參觀を終りしかば宿にかへる、時刻は五時頃實際營門內に一歩でもはいつてゐる間は別天地で自分等の精神もおのづとふるひ、すべて活動的奮鬪的になる樣に覺ゑた、夕方兵營から喇叭の響がきこゆ一種の云ふべからざる感にうたれる、時々此國名物の時雨きたる敦賀までも遠き事とて夜は九時まで自由であつた外出したる者は殆んどなかつた。

宿の蓄音機をかりて遊ぶもの、聯珠に無中になる者樣々又本日案內被下し谷口見習士官訪ねられて愉快に話される、氏は容貌魁偉、性質磊落慈愛心にとみ彦中時代にはボートのチヤンの一人にてつとに聲名ありし快男子この人をかこみて話す、すこぶる痛快得意の「チヨル」をふりまきて快談された十一時頃就寢例の時雨又至る。

第二日。此の記事は眞面目に讀んで貰いたい。只文章を見る目的で讀むとアテがはづれる……まア今日の實彈射擊の的のはづれた位はゝづれよう。

○早朝の壯感。　遲明劉曉たる喇叭の練習あり、正氣天に滿ち地に塞がり感慨轉た深遠、既に人生の眞意義を解するあるが如し。

○實彈射擊。午前八時金山射的場に達す、三面に山ありて、今來し方にのみ開けり、この山ふところの奥まりたる所に標的あり。谿流其間を屈折して潺々の聲をなす。標的四つを使用し第一回は射距離三〇〇米伏射の姿勢にて二發宛うつに監的手の報ずる所概して治痕竿……零點の記號治痕竿……例へばかの元日や冥土の旅の一里塚と題したる其下に一休和尙の棒げたる樣のものなり、ついで二百米に接近して膝射、立射をなす、其成績は左の如し。

姓名	伏射		膝射		立射	
小松哲精	0	0	1.8	0	0	0
北村春吉	0	0	0	0	0	0
岸本千代丸	3	0	1.5	0	0	0
大西太二	0	0	0	0	0	0
小池廣次	7.5	0	0	0	0	0
柴田太三郎	0	0	0	0	0	0
西居忠一	.7	0	1.	0	3.	0
木子豐	0	1.	0	0	0	0
川崎長一	0	0	0	0	0	0
遠藤歌三	0	0	0	0	0	0
木川正義	0	0	0	0	0	0
林尙憲	.1	0	.1	0	.1	0
高橋保良	.1	0	.6	0	0	0
守村和三	0	0	0	0	0	0
北村宣太郎	0	0	0	0	0	0

姓名	伏射		膝射		立射	
川井誠一	0	0	0	0	0	0
吉川卯次郎	0	0	0	0	0	0
田井中信一	0	0	0	0	0	0
中西藤四郎	3.	0	0	0	0	0
西島源次	0	0	0	0	0	0
寺村良太郎	0	4.	0	0	0	0
瀬戸川三	0	0	0	0	0	0
杉本好一	0	0	0	0	0	0
寺澤政四	0	0	0	0	0	0
辻善一	0	0	0	0	0	0
林田喜一	0	0	0	0	0	0
伊藤義明	0	0	0	0	0	0
中野逸太郎	0	0	.5	0	0	0
藤居忠男	0	0	0	0	0	0
上阪香苗	0	0	0	0	0	0
增田豐	0	0	0	0	0	0

清水定平	7.	0.	3.	0.	4.	0					
元持德三	0	0	0	0	2.	0					
西村　光	·6	·2	0	4	0	1·					
押谷利吉	0	0	0	0	0	0					
永江市三	0.	0	·1	8.	0	0					
東池清三郎	1·	0	9	1.	0	4.					
中川半次郎	0	0	0	·6	0	5·					
若林敏次郎	0	0	0	0	0	0					
堀口增太郎	0	0	0	0	5·	8					
池田先生（膝射）	8	8	·1	0	·7	9					

二時間計りにして終了し歸途に就く、時に一陣の金山おろし颯然として襲ひ來り雨は車軸をも流さむ計り。我等驅足を開始す。宛然戰場の如く然り。あゝ古今の雨或は道灌をして七重八重を解くに苦しましめしあり或は奈翁をして之に泣かしめしワーテルローの沛雨あり。笑ふべきあり、悲しむべきあり。然も今日の雨は我等の印象を深からしむる天祐の雨たり……と感じつゝ十町余の道を宿舍に驀進しぬ。

左に射歩兵撃教範中より我々に趣味あり且つ重要なる項を抜萃して參考に供すべし。之等は曾て本校にて射撃練習の際教授せられし事のみなり。

第一、　射撃は戰鬪經過の大部分をしめ歩兵の爲緊要なる戰鬪手段なり故に射撃技能の精熟は歩兵の戰鬪任務を達成する爲必須の要件なりとす。

第卅、　精神の沈着、姿勢の堅確竝眼、心、指の一致は命中を良好ならしむるの要素なり。故に射撃豫行演習及實包射撃等に於て特に此要素を涵養するに務むる事必要なり、其地裝塡の速なる事、照準裝置の正しき事、据銃の速かにして確實なる事、照準精密にして且其時間の短少なること等も亦絶えず練習せしむべき要件なり。

第六十一、　狹窄射撃は狹窄彈を以て射撃の動作殊に照準及撃發の要領を練習する爲に行ふものとす（我等は三回實習せり）

第百六十一、標的の種類左の如し

一、圏的。二、人像的。三、圏頭的。四、散兵的。五、機關銃的。六、騎兵的。七、砲車的。八、命中試驗的。

第百七十三、　射撃場及標的に附屬する射撃用具は記號、番號旗、示號標、監的鏡、治痕竿及監的用具とす其他電話機、双眼鏡、秒時計、氣象器械等を備へ得れば便なり。

第百七十四、　記號板は矩形板に一桿を固着したるものにして其表面は白色に塗り標的に應ずる番號を黑書し裏面は赤色に塗り之に諸記號等を記載すべし。

第百七十五、　號旗は赤色白色及赤白色相半する矩形の布を竿頭に附したるものにして一般の警戒を表する

には大形の赤旗を用ふるものとす。

第百七十六、　監的鏡は一桿の上方及下方に螺子を以て隨意に俯仰し得る如く鏡を附着したるものにして監的號或は掩蔽内にありて射場の記號を見るに供す。

第百七十七、　治痕竿は竿頭の一側に圓板を附し其背面に治痕具を具へたるものとす。

其他物理的の説明には面白きものあれど四年以下の諸子には我不關焉の事なれば略す。

○午後は第十二中隊の中隊教練を觀る。

廣漠なる平野之即ち神聖なる練兵場なり、凡そ中隊は戰鬪の單位にして中隊長を核心とせる士氣結合の基礎なり中隊教練は即ち中隊をして如何なる場合に於ても中隊長の號令又は命令に從ひ擧止恰も一体の如く整正確實に規定の運動を實行し得しむるを主眼とす。練兵は密集教練にては整頓、銃の操法、行進、方向變換、隊形變換等、散開教練にては散兵線の構成、運動、延線及伍間增加、突擊等あり分別式にて終れり。一擧一動嚴肅端正、威嚴ありて勇往邁進の氣象勃發し軍人精神即日本魂は沛乎として練兵場に磅礴す。

○次で營内に歸さて徒手体操、器械体操、木馬、柵、梁木、巾飛、障害物通過等を見る。器械体操等は本校生徒にても其技相若くものあらむ。されど其意氣は未だし、弓の持滿の末に發すゝふとは巾飛等に於てよく其意を得たり、懸聲一喝躍り來る樣は浚猊の咆哮もたゞならず、過れば「過り」と明言す。軍人精神の發揮燦然たり。劍術教範に云へることあり、擊突は勇壯果敢己を捨てゝ施行し、擊突功を奏せざるも尙敵手を壓伏するの氣力を以て再び擊突するを要す、縱令ひ擊突功を奏したりと信ずるも決して氣力を弛むべからず是

れ嗣後の變に應せむが爲なりと、又絕て防拂したる時は直に反擊(突)を行ふべし若し防拂するの餘裕なき時は寧ろ己を捨てゝ擊突を行ふべし蓋し其氣勢の如何によりて敵手を躊躇せしめ反つて我が擊突の功を奏すればなり、と。軍人精神とは蓋しかくの如し。凡そ本日參觀せし所皆軍人精神の充滿を以て評すべく而して他の語を以て評し難し。逐一の記錄は蛇足なれば省略す。

○夜の茶話會　旅團副官中村中尉殿、谷口見習士官殿の御來臨講話あり且つ茶菓を贈らる。歡樂を盡して歇む。

第三日目、　嚠喨たる金吹の響に温き夢破られ、床を蹴て起くれば正に五時。

今日は小隊教練の檢閲を受くる日也、余等が獅子吞牛の勇氣虹の如く、池田先生の鼻息亦荒かなり。夜來の雨全く霽れて碧空纖雲を見ず。

集合は七時と聞くに、旅宿の婢未だ慣れざるを以て、朝餉速に調はず、食事全く了らざるに刻々豫定時に感りて猶豫すべからず、儘よ武士は食はねど高揚子、彦根の健兒何ぞ躊躇せんや、立に結束、整列し、歩武肅々堂々練兵場に向ふ。時に遠くより軍馬の嘶き一聲、諸子の意氣奮然として萬山萬岳踏み破るべし。

練兵場の朝靄名殘なく歛りて矚目開豁廣漠たる平野際涯なし。顧みれば、今の檢閲官木村中佐、泰然として鞍上豐かに愛馬に秋草を食せつゝ、數歩の内、寺村中尉、谷口見習士官も見ゆ、時辰機を窺へば七時を過ぐること既に五分。嗟乎後れたり。頃之小隊教練檢閲細目の傳達あり、池田先生抜刀一光號令一喝、余等手足を動かすが如し。

閲兵

密集教練

整頓、銃操法、直行進、斜行進、方向變換、隊形變換、

散開教練

散開、行進停止、射撃、突撃、

次ぎて分列式を行ひ檢閲全く畢りを告げぬ。

中佐馬を降り赫顏鬚髯微笑を湛へつゝ、「學校の生徒にして而も三日の時日を費して我聯隊參觀見學の擧ありしは、實に諸子を以て嚆矢となす、古來我國は農を本とし以て建つ、日露の大捷は天祐と陛下の御稜威の致す處なれども百萬の貔貅がよく滿州の曠野に轉戰して報國盡忠したるに依るや大なり。兵は兇器なりと雖も現今は未だ武裝を解きて幸福なる平和を望むべからず兵甲足つて初めて平和の實を擧げつゝある此時諸子の此擧や實に彥陽赤鬼の武士的精神が溢れて然る也と國家の爲め甚だ慶賀に堪ゆず、依て我聯隊は萬腔の熱誠を以て歡迎するもの也」と前置きし除々として縷々數千言檢閲の結果を講評すらく「諸子が練兵の形式は充分なり敢て軍隊と比較して遜色あるを認めず、然りと雖も諸子を閲兵し整頓、銃操法を視たる時其の態度嚴として節度立ち人をして肅然たらしむるの概ありしや否や行進の時戛々たる佩刀の音敕々たる靴の響をして慴服せしめ劍茫寒く突擊を試みたる時金山爲めに震ひしや否や余は敢て少しく節度を缺き勇氣に乏しと云はんとす諸子にして今一層の節度を守り凜然たる勇氣を養へば完全にして無缺なる理想的のものたるを得んこと何の疑かゝあらん冀くば諸子國家の爲め拮据努力し身を軍籍に入るゝものは勿論、商に農工に從事するものと雖も一旦緩急あれば義勇公に奉ずるの覺悟ありたし尙其の動作に就きて細評せんに」とて銃の操法閲兵、目標の取方、行進の秘決等細心なる注意を與へられる。

聽て型を正し鬚髯を張つて曰く「時間を浪費するは我國民の通弊性なり、軍隊之を嚴禁す、今諸子は七時の集合也吾馬を驅て來るに一隻影を認めず後五分にして諸子漸く來る、實に上長に對するの禮を失せりと云はん諸子今五年中學に在ること旬月を出でず世路崢嶸夷ならず時の貴重なるを思はずんば安んぞ成功の月桂冠を贏ち得んや」と池田先生前みて其の勞を謝し且つ其の時に後れたる理由を具申す中佐「旅舍の無責任なる大旨如此」と呵々哄笑胸中光風霽月の如し。

旅宿に還りて晝食を携帶し名殘の袖をふり切つて松原公園に向ふ行程僅に一里半

白砂青松は松原を言ひ盡して遺憾なし余の贅言を要せじ。武田耕雲齋の瑩を憑弔ふ、松籟志士の赤心を頌するが如し余等襟を正して肅然たり

松原に敦賀商業學校あり新築なれば木の香ひ鼻を撲つ余熟ら以爲く殉國の士の播は數十歩の裡に立り見渡す限り皓々たる白砂葱々たる青松なり自然の過去の人の及ぼす感化や實に著大育英の形勝地なり、余等亦思出多き龜城下を仰ぎつゝ學庭にいそしむ幸福き身也敦賀の商業が殷盛となる源泉が此校なりとせば我庠なぞか江州の隆昌を來たす淵藪ならでやはと。

留玩すること約三十分金ケ崎に向ふ。

歌ヶ崎にて辨當を喫す、風靜にて波高からず白帆往來し絶景云ふべからず。此處にて午後四時停車場に集合の旨を約して自由開散す、皆嬉々として蜘蛛の子を散らすが如く或は金崎城趾を尋ねて江魚を釣りて飢を資磯菜を取りて日を過し坎坷不遇に終らせ給ひし、尊良恒良親王のありし昔を偲ぶものあり或は我織れる錦と や見ん唐人の敦賀の山の峯の紅葉は何れぞと求めぶらつくもの、或は氣比神社に賽して捧げ銃するもの、足に任せて土産物調ふるものあり。

曩に木村中佐に青天の霹靂をくらひたる身の烏ぞ時刻を守らざるべき陸續停車場に蝟集し四時の時計を合圖に人名點呼して缺員なし、乘車す。

初めは窓外の秋色潺々たる溪水の響に憧憬れしもやがて暮色遲くより襲ひ來りて夜の幕にとざされ月は出でず、たゞ轟々たる車輪の響と訛み聲の軍歌の調べとのみ耳に入る。柳川に着きし頃はそれも聞へず知らず菊田屋の二階聯隊の炊事場、木村中佐の赫顏を夢みつゝありしや否や

九時彦根に着す、夜色沈々寒氣肌に砭し電燈の光幽かなり。

停車場より校門まで軍歌の絶間なし渡るに易きの、四百餘州の、道は六百の、靜けき將に夢路辿りし城山の雪客驚きて羽音忙しく北に飛ぶ夜目にも著るし。

宿直の遠山先生と門衛の老英雄と校門まで出迎へらる叩首し、控所に入り、武裝を解き、解隊す

此行僅に三日の短時日なりけりと雖も余等に印象深く或物を感銘せしめたること實に偉大なり陳腐なれども百聞一見に如かざるの理挺子にも動かし得べからず。

通信

東京通信

校友　菊澤季磨

謹啓　諸兄益々御勇勝御奮勵之條大慶至極に奉存候

陳者母校に於ては創業正に三十年卒業生實に一千有余各益々盛運に相向ひ候事慶賀の至に御座候、乍然一方に於ては一度校門を出れば全く途上の人の如く母校と何等の連絡なく又各地に於て校友會なるもの組織せらるゝも唯一年一兩度の會合のみにて基礎極めて薄弱にして何人が何時其地に來りしか何時其地を走りしか全く不明にして必要ありて或は校友の消息を知らんと欲するも全くこれを知るに由なく相互の不利益誠に僅少に非ずと存候、殊に吾人活動根本教育地なる母校と校友との間に於ては常に連絡を保ち又母校に對し校友に對し其發展の上に於て互に相助くるは母校に對する自然の義務と存候、然るに從來の實情右の如くなるは甚だ遺憾にして校友各自に於て其責を分つべきものと存じ夙に同志相謀りて善後の策を考究致居候へ共之亦右の如き事情にては其目的を達する容易の業に非ず先第一歩として校友集散の中心地たる東京に於て互に連絡を保

ち以て、母校との連絡を圖れば幾分の基礎も得らるべく就ては從來の如く學生委員のみにては到底永久に其目的を達するを得ず必ず其の連絡の中心たるべき機關を設くる必要有之爲に先輩を煩はさん事を相謀り候處幸第五回卒業生にて當地に活動せらるゝ大久保藤吾君（小石川區水道町二十五番地）萬事其勞を取るべしとの御承諾を得候間自今上京せらるゝ方及當地にて轉宅せらるゝ方は必ず同君迄其旨御通知被下候へば絶えず連絡を保ち得各自の便益も僅少ならずと存候、右の如くして漸次相進みて各地と母校及各地間の連絡を得るに至れば十年二十年の後に於ては二千三千の會員を有する一大團体を組織するを得る誠に易々たる事と存候何卒校友諸兄至大の御賛同と御盡力を給はらん事切望に不堪次第に御座候　敬　具

併て去る十月十六日午後六時より牛込區西五軒町清風亭に於て校友會開會致候間當日出席者等を御報告仕り候へば

學生側よりは帝大より山下新郎君、村上義一君、伊藤竹次郎君、野間庄三郎君、古川義三君及小生の六名、慶應より外村富三君、中村吉三郎君、一高より杉本桂三君先輩側よりは日本製糖會社事務員伊藤利三郎君上京中なりし臺灣總督府事務官金田政四郎君の兩君出席せられ、當日は他に種々の差障ありて出席者右僅に十一名なりしも一同座を圓々して互に交情を温め、快其極點に達し興の盡くる所を知らず時計を見れば既に十一時を過ぐ相驚きて座を立ち互に健康を祝しつゝ解散致候

尚次年度より會日は出席者の便を圖り神嘗祭當日又は前夜と内定致置候間當日頃各地より上京せらるゝ方も萬障御操合せ御來會被下度會場等は右大久保君へ宛御出席の旨御通知被下候へば早速詳細御案内申し上ぐべく候也

四十五年一月

○あゝ苦い經驗

校友　富永晁

二三日前、一月の末迄に、次號を發行する心算であるから、何でもよい、是非投稿せよ！との報に接した。久しく何も書かないで懈つてをつたから、今度のには、と思つてゐた所であるのと、親切に、僕の樣な者にまで勸めて下さつた御好意に對し、喜んで、筆を振り、そして材料を腦中に探し求めた。が、何にしてよいかこれと云ふ名案も出ないし名文の何のと、そんな高尚なものが出る筈がない、一方、甚だ多忙であるから骨折つて、これにのみ、時間を奪はれて終ふ譯には行かぬ。この夏の事である、唯ならぬ出來事が、僕に起つた。僕の想は忽ち、これに馳せた。僕の持つてる筆は、同時に走り出した。即ち以下の樣な事である。

諸君！御承知の通り、僕はこの春、母校を辭した。それから、進んで、高等學校に入學せんと決心し、準備と云ふ程でもないが、先づ、その準備に取りかゝつた。大丈夫と云ふ自信を懷いて、愈々七月に受驗した。その結果、見事、失敗したと云ふ經歷を有するものである。つくづく、苦い經驗を嘗めたのである。

わが校友會誌を播いて見ると、毎號のやうに、先輩諸兄から、或は、「田舍便り」であるの、「經驗談」であ

るのと云ふ名目の下に、いづれも、有益な、受驗談を書いて吾等後進者の利便を計られたのに氣付く。吾等は實にこれ等に接する毎に、其幸福を感謝せねばならぬと思ふ。尙詳しく注意して見ると、それ等の多くは花々しい成功談、即ち、首尾よく入學し得た側のもので、その反對の方のは、あまり見受ぬのである。從つて、僕は何々校を受けて、何々を、うまく行つて、何百人の所へ、何人合格した、卒業してから、斯樣〳〵の本を參考にして斯々の勉強法をとつて、そして、斯く行つたんだ。諸君も、僕の後を踏んで來給へ、又、何か問ひたい事があらば、遠慮は損慮、假令、一面識もない人でも、かまはん、吾人は、これに敎ふるに躊躇せぬのである」然として、一見忽ち自分も亦此くありうべしと豫想するべく、難くなかつたものもあつたと記憶する。

諸君、實は、僕も、受驗地に赴く前、こう思つておつた。どうか、自分も成功談が書きたいが、そして、この雜誌の一面を飾り、併せて諸君を利するやうな事があらば口をきくがと心竊かに祈つてゐたのであつた。豈計らんや！事實は、全々、これと反對して、そんな所か失敗談を諸君の前に致して、面目もなく、恥を曝さなければならぬやうな、こんな悲しい境遇に陷入らうとは、あゝ誰か豫想しおりしものぞ。

併し、さは云へ決して決して、此くは思つて、いつまでも、ゐない。反つて、これより何物かを諸君に告げる事が出來るのを喜ぶ次第である……なぜゝと大分横道に入つたが、笑うてはなりませぬぞ！失敗談の例は少ないやうに思うから、丁度、僕が、レコードを破つて、こつちの方を少し述ぶべき責任を、或は天から與へられたのではなかろうかと、聊か幸榮と存する。

前にも申したやうな、僕は、勉强法や、讀むべき本やを、かれこれ言ふ資格がないから、何もこの事に關しては言ふまい。諸君の御考に一任する、或は他の先輩諸兄、經驗のある人にお尋ねになるも一法だろう。僕の同窓中高等學校の方にはないが、高等商業に入つた人がある、例へば福永君に聞いて見給へ、きつと、敎へて下さると思ふ。

扨、今僕の感想を書くに當つて、いろんな方面から、泉の如く湧いて來て、皆にしたら本誌一部位愚かな事である、そんな事はお許しがないから、今日は、その一部分にして、最も、有益と信ずる、二三ヶ所だけに止めて置く。但し皆失敗の賜。

一、學力は、在校中に根底を据ゑておく心要がある。

諸君！諸君が、今、無事に勉學しておらるゝ事は、誠に、賀すべき幸福な事である。中學五年間は、果して何の爲めであるかは、僕なんかゞ、謎々する必要はない、己に已に御承知の事と信ずるから、いづれもその目的の爲に進んでおらるゝは、これ亦言ふまでもない。まだ、下級の新しい方には、免に角、上級の諸君殊にまなく卒業し、校門を辭し去らんとしておらるゝ五年級の方には、この感が、一層最も明白であると思ふ、今更ながら「タイム」の流れは早いものであるから、こんな事を云ふたり、聞いたりしてゐる內に、すぐ、諸君も亦、關門に衝突る時が來るに定まつてゐる。この事も氣付いておらるゝだろうと思ふ。サーこゝですぞ！諸君、又、世の中は、段々と進步しつゝあつて競爭も、激しくなり、實力のないものは勝てないと云ふ事だが、その事も、御承知の通り。

中學を卒業して、尙進まんとするときに、痛切に、之を感ずるだろう、中學のみで終るならいざ知しらず、苟も高等教育を受けんと欲するもの、並一通りでは、やりきれないのは今更の事でない、殊に、全國幾百の中學校から、幾千、幾萬と云ふ大勢の卒業生が出て、これが皆、等しく、その目的に向つて進まんとする。そして例の關門さして打ち集うて來る、そこに、一大戰爭が起る、但し其武器たるや、各自の所有する腦力そのものである、たゞならぬ爭ひである、これが即ち、競爭試驗。僕は、この時充分よい武器を持つてゐなかつた。いや、持つてはおつたけれど、鍛へ樣が足らなかつたから、結局、敗けたのである、鍛へておけば如何に、敵は多くとも、心配はない筈のものである。

毎日、學校へ、中學校なら五年間も通うて勉强するのは、全く、この武器を鍛へんためである。而してこれは全生涯を通じて鍛へ上ぐべきものであるから、勿論、第一の戰場で勝たつたからとて、それは取る程のものでないが。時代に應じ得るだけに磨いておく必要があると云ふのである。卒業後勉强すれば入れる。なる程、それは可能であるが、それは只、今まで習つた事を復習し得るからの話、新らしく始めからやつては駄目である。

諸君！僕等が在校中は、こうであつた、試驗勉强してその場だけは出來ても、すめば最後、腦中空又空、而も、成蹟は甲である、諸君等はそんな事はなからうが、僕は白狀する。例へば、五年級の時、三角は、いつも甲を取つた。しかし、あれは、試驗に、出來た、答案が書けたと云ふだけで、本當に力がついてあつて、出來たのでも何でもない、無暗矢鱈と頭に詰めたものを（前夜）あてすつぽに出した計り、試驗がすんだと云ふは、昨日入れた智識が、どこへか脫けて行つたと云ふ方が當つてゐた。かくして自分は三角は得意である、見よ甲でないかと、こう思つてゐる。自分を僞つてゐる大罪人が特意がつてゐる、あゝ再々、僞りの多い世なる哉と今更ながら感ずるも、よしなき次第である。

力なくして業を終へても何の役にも立たぬ。試驗に落第點を取つて、奮發して、も一度やつて、實際の力を持つて出る方が遙にましである。實力！實力！誠に實力なるものがよい武器、鍛ふべき、養ふべきものである。今の學生は中學は卒業しても、手紙一本、碌に書けない、五年の間一週に六時間も七時間も、英語をやつてゐながら、本も讀めない、會話と來たら尙更の事、數學をやらせて出來ない。と或人が言ふたが、最もな次第である。顧みると、僕等のクラスは一般に不眞面目で勉强家がたまにあると笑ふて「今に死ぬんだ」などと言うてゐた。實力を有するものは無くて、大方、試驗勉强的であつた。惡い習慣であつた。若し、諸君のクラスもさうならば、甚だ以て、嘆かはしい次第であるが、そんな事はなかろう。今習つておらるゝ事は皆將來のためになる、この事は、四年級のとき、或先輩から聞いた、今になつて僅に解しゐらるゝ。そしてこれを聞いた時に、氣張つておけばよかつたにと後悔する、卒業生に、かく云はぬものは稀である、思ふに、校中勉强が足らなかつた。

中學の三年級位から、人間の性質が變つてくるやうに思はるゝ、四年五年と云ふ所は、一番大切な所。この時機を、うか〳〵と過しては、大損害を來すと思ふ、よろしく、やるべき時にしつかりやるべしである。已が習ふべき本と首引きやるがよい。卒業後、受驗の際、數科書を復習すれば、十分と云ふは、畢意、この時

の養成如何に存する。

諸君が今、在校中勉強しておらるゝ事は、この意味に於て幸福である、タイムを利用し給へ。一度過ぎ去れば再び歸へり來らず。あゝ！この時、眞に、この好機！幸に奮闘せられんことを祈る次第である。

色々な事情があつて、思ふ通りに勉強も出來ぬものである、吾人弱き人間は、理想通り行かぬが常、兎に角出來るだけ、ベストを盡くすと云ふに盡きる。

要するに、想應の學力は、在校中に備へておかねばならぬと信ずる。次に

○試驗の意義

僕等も、臨時試驗である學期試驗であるのと、多くやられたので、殊に五年級の時は、その方法が新らしくなつたので、隨分驚ましかつたものである。が多くのものは、試驗なるもの〻眞意義を解しておらぬやうな氣がした。自分の學力を試してもらふ、ベストオツポーチユニチー最良機會であるとは、夢更想はないで、一般に嘆はしい現象を演じつゝあつたものである。本當云へば、出來ないものは出來ないで、男らしく、答案を出す可きである。のに實際は、どうして、どうして、國家の中堅たるべき堂々たる學生が、人を欺き自己を欺き、恬として恥づる色更に無く、而も一級殆ど此くの如しと聞くに至つては、如何に其意義を誤つておるかを證しておるではなかろうか、如何に不眞面目であるかを明に示しめてはおらないだろうか。顧みれば、僕等も、かゝる内に養はれて來たので、試驗場の光景は、一面に於て罪惡を造る所であつた事を想うと、實際泣きたくなる。茲に於てか、席順それ何するものぞ、悉く、僞、深く思ふに足らざるもの。

こんな事して來て進んで、全國の卒業生と競爭をせんとする、失敗期せずして明白、天は正しいものである。「何事も知らざるものは知らずと答ふべし」これ、男子の言行でないか、問題が出來なかつたら、飯宅後やつて見て出來ればよい、自分のものにして置けば足るでないか、そのための學校である、試驗のために學ぶではなくて、學んだのを試すが試驗、讀んで字の如し、これを轉倒すると、意味が解からなくなる。

○愛校の精神と受驗の結果

僕は、在校中は、責任も自身だけに止まるので、左程重く感じなかつたが、高等學校に受けた時は、少なくとも、クラスを代表し、母校を代表し、何でも成功せねばならぬと思うてゐた。尙大なる責任を負うてゐた而も果す事が出事すして不覺を取つた、何分申し譯けがない、口を出す資格もありませぬが、この心根たるや一笑に附し去らるゝや或は、わからぬけれど願はくば、諸君も持つておかれたいものであると思ふ。一校を代表し、体面を、あくまで、維持し男らしく、堂々とやるはこれやがて、諸先生の久しき薫陶に報ゆるため、一は又、校を愛するの精神に外ならないではなかろうか。「學校を出てしまつたから後はどうでもよい」そんな事では仕方がない、在校中に、例へば武德會に出演する時なんか、實に一校の体面を隻肩に負うて行かるゝが、穴勝ち在校中のみがつとめでなく、苟も、已が五年間も養育された母校に對して、そを愛する精神は、いづこに至るも、あらはさねばならぬと信ずる。

序に、先日、同宿のKなる人の話に、この人は、千葉醫專に入學したのであるが、驚ろいた事には「彦根中學はどうも「ストライキ」をよくやつて評判がよくない」と先生からも云はれ、同級生からも、たまで相手に

せぬとの事で同君も、在校中は、そんな事とは氣づかなかつた一人であつたが、さすが今では解つて來てゞうも不眞面目であつたと云はれた、こんなもので、今や全國からすぐに注目される場合である。よく〳〵休面を重んじてもらいたい、學校全体が注意して欲しいと切に願ふ次第である。（僕は理想的クラス會の設立を希望する一人である）。

次に首尾よく、行けば申分がないが、何分、何倍とてある事故、皆が皆まで成功することは斷じてない、必ずや、苦い經驗を賞められるに定まつてゐる。あゝこの時！諸君、決して落膽してはなりませぬぞ！「ベスト」を盡して斃れたとて何のその人にやむ所ぞ。軍人が彈丸已に盡き、屍を戰陣に暴すと何ぞ異る所があろうぞ。立派なものではないか、又、一年や二年位、おくれたとて、何だ、人生の深き意義から、推し考て見給へ。友人に不面目であるの世の人がどう云はうが、頓着する必要はない。やれるまでやつたらよいでないか。我輩が生をこの世にうくるや、皆何かをなさんためでないか。しかして、そこには幾多の困難あり、障害あり、これ皆我等をして益々偉大ならしむる所以のものではないか。一度や二度の挫折に屈するが如き意志薄弱の徒がどうして人生を全うし得やう、全國幾多の青年中、失敗して、自殺を企てるやうな小膽者もあるとの事であるが、さりとは氣の毒な人間ではないか。僕は受驗地に赴く前に次のやうな文句を見た。それから其後又其次のを見た、序に記すから研究して見給へ。

We ought not to look back upon unless we delive some useful lessons from the bitter experience of the past.

Who at twenty knows nothing, at thirty does nothing, at forty has nothing.

Yet the Italian proverb adds "He who knows nothing is confident in everything".

深く思ひ當る所があるのである。

右の三問題は僕が痛切に感ずる所、敢へて、諸君の前に、失禮をも顧みず、呈して御參考に供する。

若し夫れ、五百の學友諸君中、幾分たりとも、これによりて得る所あらば、こは永へに、無意味でないことを確信して喜ぶ。

終りに臨みて、更に一語を繰り返さしめよ、諸君が、日々、やつておらるゝ事は、晩かれ早かれ、將來に影響するといふ事を。

さらば、諸君！五百の學友諸君！自愛、自重、而して眞面目に、勉學せられんことを。

（四十四年十二月二十六日稿）

◉故宇野敏正君の死を悼む

校友　高橋貞太郎

凡そ生を天地間に享けて死せざるものあらむや、植物にまれ、動物にまれ、皆然らざるものなし。然り、而して人たるもの此の命數を免れ得ざるか。未だ死せずと云ふものを聞かざるを如何せむ。嗚呼死は斯くの

如く吾人に等しく課せられたる運命にして、かくの如く吾人の聞き馴れたる見馴れたる事にして、而して何が故に斯くは悲しきぞ、何が故にかくは痛ましきぞ。迂生未だ其故を知らざるを愧ず。然りと雖も、誰かそを悲しむべく、痛むべきものならずとせむや、あらばそれ其人は、已に吾人凡俗（普通の人間の謂）に非ざるなり。解脱を得たる人あらずんば是れ白痴か、嗚呼悲しむべきものは死、痛むべきものは死！

逝けり、敏正君は逝けり、嗚呼簡單なる此の言葉、而して何ぞそれ悲痛なる。

そも迂生の敏正君と相知るを得たる、蓋し中學入學の時なり、敏正君、年尚ほ若しと雖も、秀なり、首席を以て撰抜せられ、初對面の式に際し、其魁偉なる体軀、其嚴肅なる口調、滿校の生徒をして彼あるを知らしめたり。爾來五週年、拮据黽勉、常に優秀衆を抜き、更に進んでは世の所謂難關と稱する高等學校入學試驗をも難なく切り抜け、今や來るべき活動の準備かさ〳〵怠りなかりしなり。生等同輩の等しく望を囑せし所敏正君一家の幸福を羨まざるものなかりしなり。

さるにてもつれなきは、天なるかな、命なるかな。花ならば蕾、花もあらむ、實もあらむ、此の若う人を些細のいたつきを名殘りに、また歸らざる永き旅路に立たしめたるぞ哀れなる。嗚呼天よ天よ、彼をしもいけにへたらしめずとも、廣き世のあまた代るべきもののあるべかりしを、さても變へがたきは命なるかな。そも命は不可抗的なるか。嗚呼悲しむべき此の死。

敏正居士と相知るを得てより歳月僅に七歳に滿たず。人生五十と云ふ、七年決して長きに非ざるなり。然れ共此の最後の二三年たるや、之れ誠に人生の一大難險と稱する所、思想の轉換期、短しと雖も其間に於ける雜多の事件、變化實に人世の半に値するものあらむ。迂生其間に於て敏正君と相知るを得たり、何ぞそれ幸福なりし、知るものは知らむ居士は之れ大量の人と、その肥滿なる大軀、その寛容なる態度、その緩調なる歩々、常に莞爾たる顏貌、一として居士の性格を表はせるに非るなし。而して迂生は外貌に於而、將た內質に於而、一として居士に應ずるなく全く相反す。然もよく左右に懸離するなく、東西に背馳するなきを得たる、それ或は天の配か、あらずや〳〵。居士よく我を知りしなり。我よく居士を知りしなり、時には論相和せずして口角泡を飛ばし、卓をたゝいて隣客を驚し、夜の更くるを知らず。時には杖を郊外に曳きて自然の大を稱し人事の少を嘆じ、斯の如くにして居士の智に接し、知らず〳〵の間に居士の浴化をうけ、斯の如くにして互に相樂しみき、未來を夢みつゝ、互に將來を語りつゝ。然も近き間のありたりに此の恐ろしき死のある事を思はざりしなり。嗚呼敏正君も吾も共に誤りしか。あらず〳〵敏正君は誤らざりき。聞く、敏正君は其の命致漸く終焉に近きしの時、人に告げて曰く「吾れ今日今時此の事ある既によく知る所なり」と。嗚呼居士は誤らざりき、居士は世にも羨ましき大往生を遂げたりき、居士は病中既に死の痛むべきものに非るを知りしなり。解脱の人〳〵、居士は此の世に於て少くとも解脱の人となりしなり。總ての罪は居士が發心の光に消滅失せて、無垢圓滿、美しきことみ佛のそれの如くなる心を以て、汚れある罪ある此の世を去りしなり、居士に於而死何ぞ悲しからむや、さるにても我々凡俗、居士の大往生の樣を聞き及て羨しく思はざらむや。

悲しき哉死、悲しき哉死。嗚呼一度び敏正君と相語る能はざるか。あらず、敏正君は死なる膜を以て隔てら

れたる樂しき、美しき世界にあるなるぞ。吾は凡俗、解脱の人に非ざれば行き得ざるをそも如何にかせむ。彼れを思ふにも此を思ふにも死より悲しむべきものはなけむ。此の悲しき死をも悲しとも思はず、恐ろしとも思はざらむ解脱の人、嗚呼それ偉なる哉、それ大なる哉。

居士よ居士、吾れは此の汚れある、此の罪ある、うたかたの世に迷へるぞや。さわれ近く居士が跡を追ふて、共に樂しく語らうずるぞや。

罪びとが、汚れたる言葉もて、居士の淸き御魂を騷せ參らせしを許し給へ　（四五、二、一八）

○永の御別れ

校友　高橋貞太郎

中學を卒業して更に高等の學校へ入る。そうすると澤山友達も出來よう、が然し同じ中學を出た友ほど力になるものはない。況して中學へ入つた時から一緒で一緒に同じ學校へ入つて同じ樣に勉强して居る友達程力になるものはない。而して幸なるかな僕は此の力になる便になる所の友達を持つて居つたのだ。それに何事であるか、僅か十日余りの病氣で彼は永へに世を去つたのである。悲しいと云はふか痛ましいと云はふか、到底言葉や筆を以て言ひ表はす事は出來ない。況してや僕もと兄弟なく、姉妹なく彼を以て唯一人の相談相手と賴んで居つたのであるに於てをやだ。胸に積る數々に就て少く諸君の前に陳べ立てゝ胸を晴らさうと存する。

丁度去年の十月三十日の事であつた敏正君は例の調子でユックリと靴音高くやつて來た、はあー來たなと思ふて居つた、果せるかなドアを開けて大きなからだをぬーつと現した。ストーブを圍んで居る僕のクラスメーッの視線は等しく敏正君の上に注がれた、僕は獨逸を調べて居つた、直ちに書物辭書等、机の下へはうり込んで、外へ出た。「そんなにけち〳〵勉强すると死んでしまうぞッ」と例の快濶な調子で戯談を云つて居る僕は默つて居た。暫くして「天長節の休みには歸る、歸らないか」と云ひかけたー僕の學校では毎年十一月三日から六日迄ベースボールの大會があるので授業は休みだ　「僕も歸る積りだ天長節には中學校に運動會もあるし、天氣がよかつたら川島君（僕等の同窓）と一緒に彦根へ歸る事にしちやどうだい」「フーン」僕は快諾を與へたにも拘らず敏正君は暫く躊躇して居る。後から考ふれば此の時已に三日には彦根へ行き得ない事を知つて居たのでないかしらと思はれる。暫くして「ぢや行こう、して三日の滊車は三時にしよう、丁度彦根に五時過だからねえ」「よし」鐘は鳴る。敏正君は默した儘動物教室の方へスタ〳〵と歩いて行つた。僕も何氣なく教室へ歸つて了つた、教室へ入つてからも彦根の方へ歸つてからや、運動會の事や敏正君と川島君が來る事等をそれからそれへと考へて獨逸の方は一向お留守だつた。明くる日卅一日も敏正君は元氣よく學校へ來て居つた、五時間目の体操には先頭に立つて力んで居つた、蓋し之れ、此の時が僕が敏正君の逢者な洋服を着た、スマシタ、普通の人としての姿を見る事が出來た最後であつたのだ。体操が濟んでから「今日は馬鹿にスマシタじやないか」と云ふたら体格が美いとわゝなるんだ、お前なんか到底も駄目だい、くた

ばらぬ樣に、ちつと用心せい」と權幕常に似ず荒々しく近づくべからずだつた。嗚呼、敏正君は此時果して自分の病氣、次で來るべき死を知つて居つただろうか。否々彼は只僕の身体の弱いことをのみ口にして居つた、否、その事をのみ心配して居つて呉れたのだ。嗚呼何とした情ない事だろうか。今から考ふれば、まるで夢の樣である、僕は圖書館へ入る敏正君はもう倦いたと云ふて歸る。「明日は一日だせ、ちつと計り來月からサトリを開いちやどうだ」「之以上は開けない」馬鹿口を利いて別れて了つた。十一月の一日三時間目であつた。僕はドローイングで二階の圖書室に入つた。時間が始まつてから暫くして友達が「君と、よーく一緒に連らつて居る三部の大きい人から事づかつた」と云ふ一枚の洋紙を呉れた。「ハテナッ」とは思つたが急いでは居るし「有難う」と云ひながら開いて見た、確に敏正君の手跡である横文字が走り書にしてある。全文の意味は「今日二度もくるが會へない、明日一緒に歸ると云つて居つたが何だか發熱して氣分が悪いから失敬だが今日十一時の滊車で先へ歸るから三日頃は多分川島君と行くり積だ」と云ふのである、後から聞けば此の日敏正君は伊夫岐君（僕等の同窓であつた）と同じ滊車であつたそうだ、二人とも何心なく別れたらうに、今から考へて見れば彼は死ぬべく故郷へ歸つたのであつたのだ。僕は何事も氣付う筈はない、只、大した事でなければよいがと思ふて手紙はポケットへ差し込んで、ドローイングが後れて居るから一生懸命にとりかゝつた。（一寸斷つて置くが敏正君の事は僕のクラスメーッには三部の大きい人として通つて居たのだ）翌二日、僕は一人だから豫定を變更して彦根へ九時半の滊車で歸つた、途中能登川を過ぎる時、事なかれと祈つて居つた、外に何事も思ひもしなかつた。嗚呼此の時分には敏正君は大熱の爲に大熱に苦しんで居つたのである。神ならぬ此の身、その樣な事を知らう筈もない。翌三日、天氣は悪い、之では折角の運動會も駄目だと思ふて居つたら、果せるかな日延になつた。所が晝頃であつたらう隣の宗太さんがやつて來て、おぢさんの言付だと云ふて「宇野さんが若し雨天でベースボールの休みが延びたら電報でしらしてくれ」と告げてくれた。サテは輕からぬ病氣であつたかと今更の樣に驚いた。が然し學校の事を考へて居る位だから、そう大した事もなからうと、よき方にのみ考へて其日も暮して了つた。四日には早朝煙火が轟いた。今日はやる哩と思ふてまだ寢て居つた。正午前親戚から歸つて來たら川島君が來て居るぢやないか、驚いた來るに極まつて居るのだが、何だか驚いた、挨拶は簡單にすまして「シテ宇野はどうしのだい」何より先に問ひかけた「ウン困つた事よ」「如何にも心配らしい。段々と聞いて見ると熱が非常に高かつた。病氣は盲腸炎」「南無三寶、宇野しつかりせーよ」と思ひはしたが、傍には母も居る、老母もいる、二人共心配そうな顏をして居る之は不可ないと思つて、「一寸失敬する」と云ひ殘して散髪屋へ走り込んだ。嗚呼敏正君日頃僕の病弱を心配して呉れたのに、今君が却つて此の大病に取り付いたのか、世の中は分らないものだ。然し盲腸炎は長引くとは聞いたが、命には別狀ないと云ふ話。幸に一年位後れても構はぬ氣長く養生して呉れよ。トッオイッ考へつゝ散髪も濟んで、折角來て呉れたのである面白くなくとも二人で中學校へ行き城山へも上つて中學時代の事を思ひ出し、運動會は來賓席で拜見致した。川島君は「是非今から泊りがけで川並へ來い」と云ふのであつたが、余儀ない用事があつたものだから、明日を約して分れた。五日。午後の滊車で川並へ行つた、滊車の遲い事つたらない。川島君は僕の來るのが遲いと云ふので停車場迄迎へに來て呉れた。川嶋君の家で御